

身近な環境へ主体的にかかわる子の育成

～小動物にかかわりを持たせる環境を通して～

うるま市立伊波幼稚園 教諭 金城 都

I テーマの設定理由

幼児期では、自らの生活の中での直接的・間接的体験を通して、あらゆる環境からの刺激を受ける。その際、自ら興味をもって環境にかかわることによって様々な活動を展開し、充実感や満足感を味わうという体験が重視される必要がある。しかし、近年少子化や核家族化が一層進み、人間関係が希薄化していることで、幼児が多様な考え方に触れる機会が少なくなる傾向がある。また、情報化社会の急激な発達によって子ども達が室内で遊ぶ傾向にあり、直接的な体験をする機会が減少する等、子どもを取り巻く環境は大きく変化している。

幼稚園教育要領第一章、第一節「幼稚園教育の基本」において、「幼児期における教育は、生涯にわたる人格形成の基礎を培う重要なものであり、幼稚園教育は、学校教育法第22条に規定する目的を達成するため、幼児期の特性を踏まえ、環境を通して行うものであることを基本とする」と示され、幼稚園教育における環境構成が重要視されている。幼稚園における「環境」とは、物的環境、人的環境、自然環境、情報環境等、子どもを取り巻くすべての環境のことをいい、子どもとの直接的なかわりを前提として、一人ひとりの子どもの育ちにとって意味のある環境のことである。よって、「環境を通して行う教育」とは、これらの環境の中に教師が教育的な意味を含ませながら計画的につくり出し、幼児が自ら興味や関心をもって環境に取り組み、試行錯誤をしながら環境にふさわしい関わり方を身につけていくことを意図した教育である。

本学級の園児は、園庭において虫捕りを楽しむ子、廃品の素材を使って製作活動や遊びを楽しむ子等、幼稚園の身近な環境へかかわろうとする子が多い。また、園庭での遊びも活発であり、意欲的に遊ぶ姿が見られる。しかし一方で、捕まえてきた虫や素材等に関する扱い方がわからず乱暴になったり、遊びの場が重なることによる口論やもみあい等のトラブルになり、遊びが長続きしなかったりする等の姿が見られる。

これまでの保育では、その課題解決のために職員で話し合いを持ち、園庭や室内において遊びの場を再構成し、子ども達がかかわりやすい環境づくりに努めた。また、遊びの中で子ども達が発見したことや気づいたことを受け止め、場や機会を捉えて全体に伝える事へも心掛けてきた。しかし、構成した環境に子ども達がうまくかかわってこなかったり、遊びの場に関してのトラブルが減らなかったりする姿から、教師が子ども達の興味や関心を捉えきれないことに気づかされた。また、教師の環境構成を工夫する力や、それに対しての適切な援助をしていくことに関して不十分であり、課題が見られた。

そこで本研究では、幼児の興味や関心を捉え、自然環境の中の「小動物」とのかかわりを持たせる活動を取り入れたいと考え、そのための環境構成や教師の援助の工夫に努める。また、小動物へふれあう経験を通して、「なぜだろう」という探求心の芽生え、発見する喜び、親しみやいたわり等を感じ、そのような体験を重ねていくことで、幼児自ら身近な環境に主体的にかかわっていくのではないかと考え、本テーマを設定した。

II 研究目標

小動物にかかわりを持たせる環境を通して、身近な環境に主体的にかかわっていけるような子を育む方法を研究する。

III 研究仮説

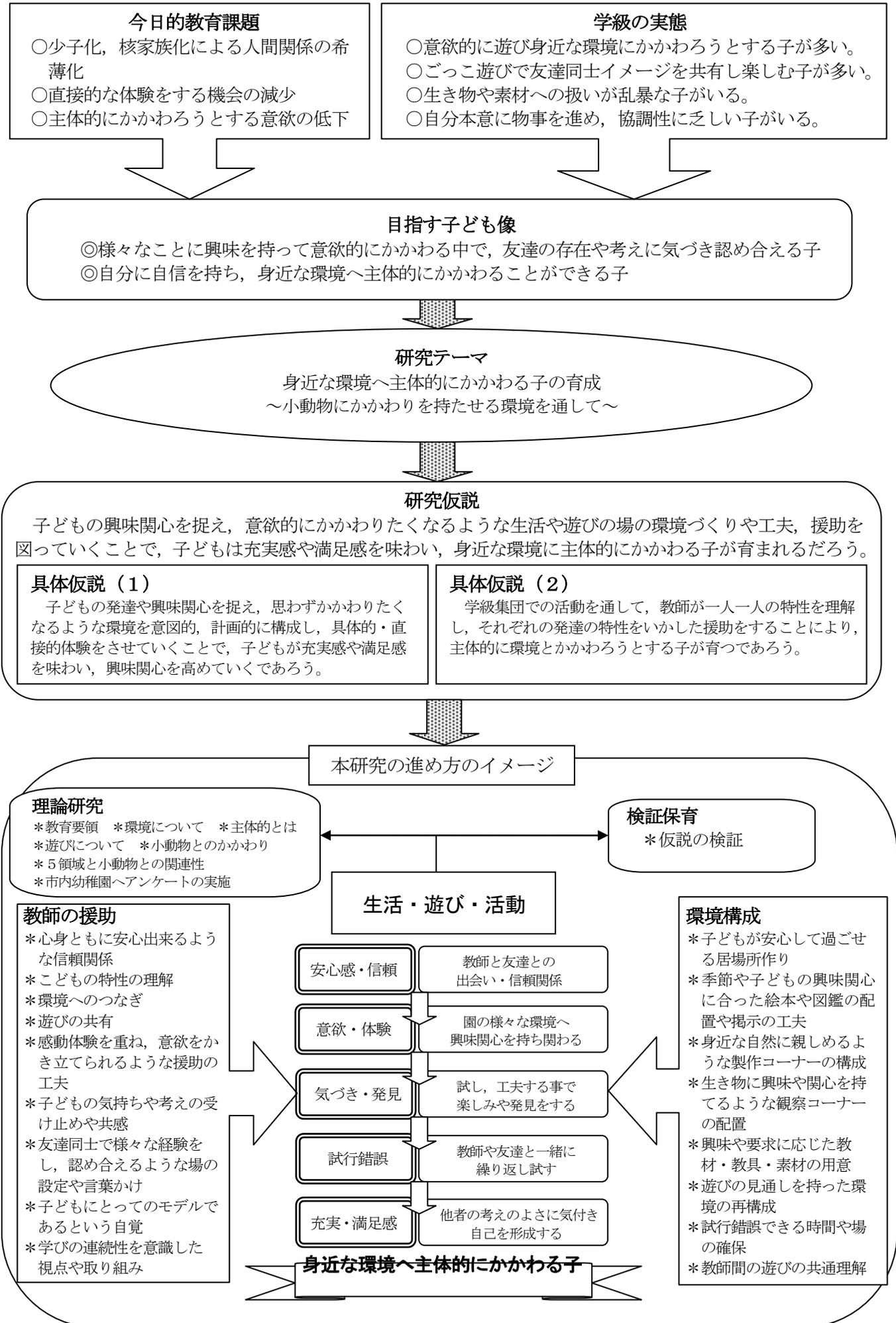
1 基本仮説

子どもの興味関心を捉え、意欲的にかかわりたくなるような生活や遊びの場の環境づくりや工夫・援助を図っていくことで、子どもは充実感や満足感を味わい、身近な環境に主体的にかかわる子が育まれるだろう。

2 具体仮説

- (1) 子どもの発達や興味関心を捉え、思わずかかわりたくなるような環境を意図的、計画的に構成・援助し、具体的・直接的体験をさせていくことで、子どもが充実感や満足感を味わい、興味関心を高めていくであろう。
- (2) 学級集団での活動を通して、教師が一人一人の特性を理解し、それぞれの発達の特性を生かした援助をすることにより、主体的に環境とかわろうとする子が育つであろう。

IV 研究の全体構想図



V 研究内容

1 「環境」について

(1) 環境とは

幼稚園教育要領第1節「幼稚園教育の基本」において、「幼児期における教育は、生涯にわたる人格形成の基礎を培う重要なものであり、幼稚園教育は、学校教育法第22条に規定する目的を達成するため、幼児期の特性を踏まえ、環境を通して行うものであることを基本とする」とある。

柴崎正行・田中泰行(2004)は、幼稚園教育における環境を「幼児を取り巻く人、生物、物、場所、時間、雰囲気など全てのこと」と述べており、小田豊・湯川秀樹(2009)は、「主体としての子どもを取り巻く全ての環境のことをいい、子どもとの直接的なかかわりを前提として、一人一人の子どもの育ちに意味のある環境のことである」と示している。また、「一人一人の子どもが自らの興味や関心、能力に応じて環境にかかわり、それに応じて環境からの応答を受け取るといった相互交渉によって、子どもの自主性、主体性の形成をはかることにある。」としている。

そのためには、充実感や満足感が味わうことができるように、子どもが意欲的に身近な環境にかかわっていきけるような環境を構成しなければならないと考える。

(2) 身近な環境について

① 身近な環境とは

幼稚園教育要領に示されている「身近な環境」とは、秋田喜代美・増田時枝・安見克夫(2009)によると、「いつでも何度でも出会うことができ、生活のなかにあり、子どもの目線から見て遊びやくらしのなかで慣れ親しんでいるもの」と述べている。また、小田豊・湯川秀樹(2009)は、「空間上の距離として近いことではなく、どんなに距離が離れていようとも、それがあの子にとって関係を持ち、意義をもっているかぎり身近である」と述べている。

このことから、ある環境へ興味・関心、また好奇心や探求心を持ってかかわることで、その環境が子どもの「心理的距離」を縮めていく。結果、それがその子にとっての「身近な環境」といえるのだと考える。

② 身近な環境とのかかわり

幼稚園教育要領解説において、「幼児は身近な環境へ直接かかわることにより興味や関心を持ち、好奇心が生まれる。物の感触を試したり、物とのかかわりを楽しむことを繰り返していく中で気づいたり、発見したりして幼児なりに環境にかかわることを楽しむようになる。さらに友達とイメージを共有したり、試行錯誤したりしながら探求する喜びを味わう。」と示されている。

幼児は、身近な環境にかかわる中で気づいたり発見したりしたことをおもしろく思い、生活や遊びの中にも活用しようとする態度が育つのだと考える。

(3) 環境構成とは

幼稚園教育は「環境を通して行う教育」が基本である。幼稚園教育要領解説によると、「環境を構成するということは、物的、人的自然的、社会的など、様々な環境条件を相互に関連させながら、幼児が主体的に活動を行い、発達に必要な経験を積んでいくことができるような状況をつくり出すことなのである。」とある。

幼児がどのような環境にどのようにかかわり、どのように体験できるかは、「生きる力」の基礎を培う上で、大きく左右するものである。教師が環境の中にあるそれぞれのものの特性を生かし、その環境から幼児の興味関心を引き出すことができるような状況を作らなければならない。

そこで、環境を構成するポイントが無籐 隆(2009)『新幼稚園教育要領 ポイントと教育活動』を参考に以下の表にまとめた。

表1 環境を構成するポイント

①発達の時期、ねらいに即した環境	<ul style="list-style-type: none"> 年間を通し、具体的なねらいや内容にもとづいた環境の構成、 幼児の発達時期や特徴を捉えた環境構成の工夫
②状況を作る	<ul style="list-style-type: none"> 第一段階(幼児の理解) (幼児の内面の働きや活動への取り組み方、その取り組みの中で育ちつつあるものを理解する)  <ul style="list-style-type: none"> 第二段階(幼児の活動に沿って状況の変化への対応) (教師が共に遊ぶ中でイメージや意図が実現するようアドバイスしたり、手助けしたりして幼児が発達に必要な経験を得られるように環境を再構成する)
③興味や関心に即した環境の構成	<ul style="list-style-type: none"> 幼児が興味や関心を寄せているものや、季節の変化がもたらす興味や関心の把握 興味や関心の高まる経験(喜び・楽しみ・葛藤や挫折を乗り越える等)が重ねられるような環境の構成

2 「主体的な活動」について

(1) 主体的とは

柴崎正行・田中泰行(2001)は、自分たちの欲求を実現しようとする意志的行動を、自分あるいは自分たちで運営していく状態」と表し、「子ども達の遊びがうまく展開しているときによく見られる光景である」としている。

また、「主体的にかかわる」とは幼稚園教育要領解説の第1節において、「幼児なりに思いや願いを持ち続け、かかわっていくこと」とある。

幼児の興味や関心は次々と変わっていく。それに併せて、環境の構成をかえていかななくてはならないが、環境が固定されてしまっているのは幼児の主体的な活動が十分展開されず、生活や経験が豊かにならない。

したがって、教師は、幼児の興味や関心の変化を捉え、常に主体的なかわりを持つように環境を再構成していかななくてはならないと考える。

(2) 主体的な活動とは

幼稚園教育要領解説の第1節において、「幼児が意欲をもって積極的に周囲の環境にかかわっていくこと、すなわち、主体的に活動を展開することが幼児期の教育の前提である」と示されている。

また、「幼児が主体的に活動を行うことができるか否かは環境がどのように構成されているのかによって大きく左右される。幼児が興味や関心を持ち、思わずかかわりたくなるようなものや人、事柄があり、さらに興味や関心が深まり、意欲が引き出され、意味のある体験をすることができるように適切に構成された環境の下で、幼児の主体的な活動が生じる。そして、その基礎には安心感や安定感がある。」としている。

柴崎正行・田中泰行(2001)は、「大切なはその活動が成功するかではなく、その活動を自分または自分たちの力を結集して当たろうとする姿勢」だとし、「幼児期に必要なのは、こうした自分たちの活動や遊びを作り出すことに喜びを感じとること」と説いている。

この喜びこそ「生きる力」の育ちにつながってくるのではないかと考える。

3 「遊び」について

(1) 遊びとは

保育用語辞典によると、遊びとは「子どもにとって生活そのものであり、子どもは日々の遊びの中で様々な経験をする。子どもの育ちにおいて遊びが重要であると繰り返されていること背景には、それによって経験されていることが幼児の成長発達に欠かせないものであるという理解がある為である。自分の興味に基づき、自発的に展開する活動としての遊びにおいて、物的にも人的にも多様なかわりをもつことは心身の調和のとれた発達の基礎となり、また、総合的な発達が期待できる」とし、幼児期における遊びの位置づけを行っている。

自発的活動としての遊びは、幼児期特有の学習なのである。

また、幼稚園教育要領解説第1章1節3-(2)では、遊びの本質について、「遊びは遊ぶこと自体が目的であり、人の役に立つ何らかの成果を生み出すことが目的でない。」とあり、「幼稚園における教育は、遊びを通しての指導を中心に行うことが重要である」と示されている。

幼児の遊びが成長や発達にとって重要な体験を多く含んでいるといえる。

(2) 遊びを通して総合的な指導について

子どもの行う活動や遊び一つをとっても、そこには保育内容の領域でいえば、様々なものが関係し、絡み合っているといえる。幼稚園教育要領解説第1章1節3-(2)②総合的な指導において「幼児期には諸能力が個別に発達していくのではなく、相互に関連し合い、総合的に発達していくのである」とあり、「遊びを通して総合的に発達を遂げていくのは、幼児の様々な能力が一つの活動の中で関連して同時に発揮されており、また様々な側面の発達が促されていくための諸体験が一つの活動の中で同時に得られているからである」と示されている。遊びが総合的であるとは、5領域が遊びの様々な面を構成しているからである。

このことから、幼児が遊びを展開する中で、総合的な発達を促すためには様々な領域の側面から捉え、幼児の主体性を大切にしながら、適切にかつ総合的に指導をしていかなければならないと考える。

(3) 遊びにおける教師の役割

幼児期は、身近な大人との間に信頼関係を結び、幼児自らの主体性を培っていく時期である。また、幼児期は、生涯にわたる人格形成の基礎を培う重要な時期でもあることから、毎日を通す幼稚園での身近な大人である教師の存在は、心身の発達に大きな影響力をもつ。幼児は幼稚園において、教師との信頼関係をよりどころとしながら、他児との友達関係を形成し、「遊び」を中心とした活動に取り組むようになるのである。

教師の役割として、岸井勇雄・無藤隆・柴崎正行（2009）は、「主として、子どもと一緒に遊んだり、子どもが困難を抱える場面での援助を行ったりするなど、子どもに対する直接的なかわりと、子どもの興味・関心を喚起するような物や場所をつくったり、子ども同士のやりとりに保育者がかわらぬ見守ったりするなど、間接的なかわりとがある」としている。

また、幼稚園教育要領解説第3章2節 6 教師の役割においても、「幼児の主体的な活動を促すためには、教師が多様なかわりをもつことが重要であることを踏まえ、教師は、理解者、共同作業者、など様々な役割を果たし、幼児の発達に必要な豊かな経験が得られるよう、活動の場面に応じて適切な指導を行うようにすること」として、**教師の役割**に関して次の5つの視点が示されている。

① 活動の理解者 ② 幼児との共同作業者 ③ 幼児のモデル ④ 遊びの援助者 ⑤ 意図的・計画的な環境構成

このように教師には、幼児一人一人の特性を理解し、興味・関心を捉え、遊びが豊かになるような環境構成や保育実践をしていくことが求められている。

4 「小動物とのかかわり」について

(1) 動物を飼育することの意義

幼稚園教育要領の「環境」において、「身近な動植物に親しみを持って接し、生命の尊さに気づき、いたわったり、大切にしたりする」ことが示されている。

学校における望ましい動物飼育のあり方によると、「幼児期において自然（動物の飼育等）の持つ意味は大きい。幼児は、自然の偉大さ、美しさ、不思議さ、命の大切さなどを、直接触れる体験を通して実感し、心が安らぎ、豊かな感情、好奇心、思考力、表現力の基礎を培うことができる。また、幼稚園で飼育しながら生き物の成長を喜んだり、見たり、触れたり、聴いたり、匂いを嗅いでみたりなどして小動物に親しみ、世話をするなかで、自分以外の相手を思いやる心を育み、豊かな人間形成の基礎を培うことが期待できる」と述べている。

このことから、生き物とのかかわりは、科学的な思考の基盤だけではなく、周りの友達や教師と互いの思いを表現し合うことを通した学び合いや育ち合いへもつながっていくのでないかと考えられる。また、秋田喜代美・増田時枝・安見克夫（2009）は、教師の人的環境のあり方として「いかに子どもたちにその生き物への興味をもたせ、継続的にかかわらせるかによって、こどもたちの生命に対する考え方、愛情や情緒の育み方、世話の仕方を学んでいくことができる」と述べている。

つまり、その環境をいかしていけるかどうかは、教師にかかってくる。と考える。

(2) 小動物とのかかわりから育つもの

幼児の身近にあり、さわったり抱いたりすることのできる小動物は、幼児が興味や関心を寄せ、特に身近に感じられる自然環境といえる。小動物とのかかわりを通して育まれるものとして小田豊・湯川秀樹（2009）『保育内容 環境』を参考にし、以下にまとめた。

表2 小動物とのかかわりを通して育まれるもの

①安らぎと親近感を得る	小動物とふれあうことを通して、心が安定し、親しみがうまれてくると考える。そのためには、いつでもふれたり、エサをあげたりできるような環境を教師は整えておく必要がある。
②生き物について知り、いたわりや生命の尊さを感じる	小動物に親しみ、日々世話をし、愛情を抱くようになると、オモチャのように扱っていた小動物を命あるものとして受けとめ、いたわりや思いやりの気持ちを持つようになる。このようなことを体験をとおして実感していくことが、人間形成の基礎を培う幼児期に大きな価値を持つ。その際、教師がいかに子ども達に興味をもたせ、継続的にかかわらせるかによって、子ども達は生命に対する考え方、愛情や情緒の育み方、世話の仕方を学んでいくことができる。
③客観性をはぐくむ	幼児にとって自分よりも小さい動物や昆虫は興味や関心が高くなり、自分の思い通りにしようとする。しかし、思い通りにならず死なせてしまい、嫌な気持ちを味わう。そのような様々な経験を重ねていく中で、生き物にとってふさわしい環境があることを感じ取り、また自分の思いどおりにならないことも学んでいく。飼育している動物にとってどうするのが良いのかという客観的な目が育ってくる。
④自然の循環性を感じ取る	小動物を飼育していく中で、生命の誕生や、怪我や病気による死を経験することも考えられる。そこで子ども達は、命の不思議さや驚きを感じながら、生き物の歩み、次の世代への歩みを学んでいく。
⑤知的な好奇心を揺さぶり探求心をはぐくむ	小動物とのかかわりから、発見や気づきがあり、知的な好奇心が揺さぶられ、「なんだろう」と観察したり調べたりする。また、新しい発見をし、興味を持って観察する等、このように試行錯誤していくなかで探求心をはぐくまれていく。

(3) 小動物とのかかわりに関する教師の役割

子ども達が興味・関心を高めて小動物とのかかわりが深められるように、前ページの「遊びにおける教師の役割」を参考にし、次のように図で表してみた。

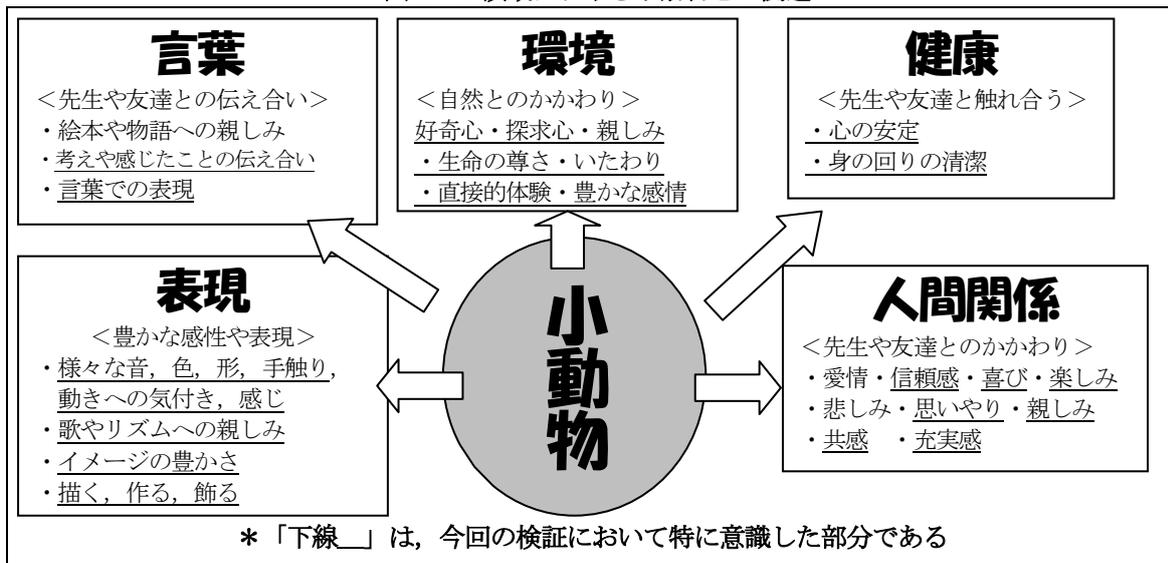
図1 小動物とのかかわりに関する教師の役割



5 「5領域と小動物との関連」について

幼稚園教育要領の領域に示された事項は、幼稚園の生活を通して総合的に達成されていくという性質をもっていることから、「小動物」に関しても、各領域との関連性が見られる。以下に図として示した。

図2 5領域における小動物との関連

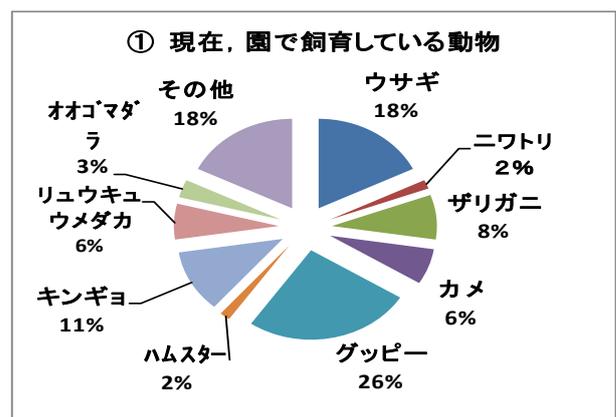


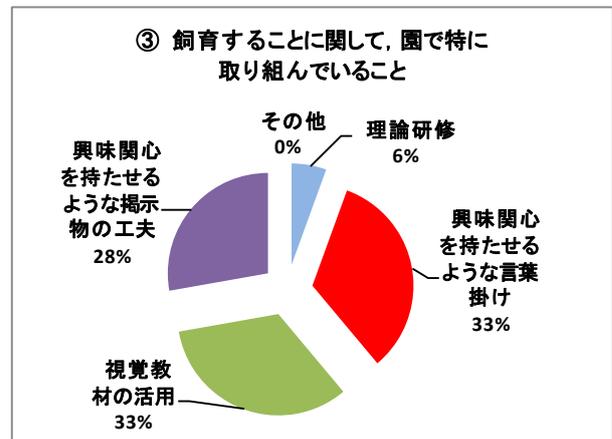
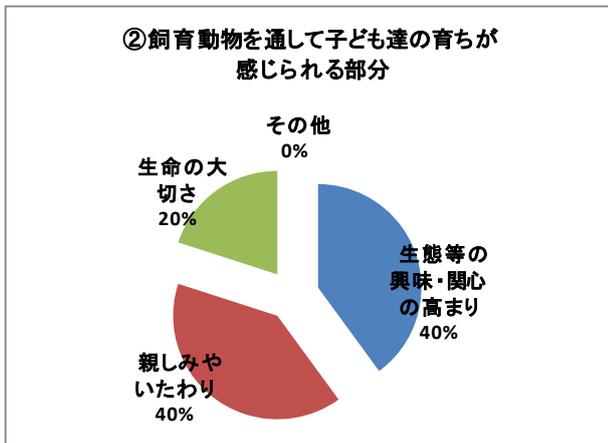
6 「うるま市内幼稚園における飼育動物」の状況について

(1) アンケートの結果 (回答率 100% : 18 園全て回答)

うるま市内各幼稚園の環境の状況を把握し、本研究における理論研究や、検証保育の手がかりとするため、「生活や遊びの場における環境」についてのアンケートを 11 月に実施した。

その中の「飼育動物について」の項目に関する結果及び、分析・考察は以下のようになっている。





＜アンケートの分析・考察＞

グラフ①の結果から、グッピー（26%）が最も多く飼育されており、ウサギ（18%）、金魚（11%）と続いている。子どもたちが親しみを持ち、また比較的にかかわりやすく、観察や世話、管理をしやすい動物が多いことがわかる。

グラフ②では、飼育動物を通して生態等の興味・関心や、親しみやいたわりの育ちは高い一方、「生命の大切さ」に関して20%と低い結果となった。これは、実際に生き物の死という事実に出会うことを体験して初めて、幼児が「生命の大切さ」を学ぶ機会になることや、幼児とともに喜んだり悲しんだりすることを、私たち教師が場や機会を捉える弱さがあると思われ、絵本等を活用して「命」について考える機会を意図的に設ける等の工夫を図り、子ども達へ伝えていく必要があると考える。

グラフ③から、教師が幼児へ興味・関心が持てるように「言葉かけ」「掲示物」「視覚教材の工夫」それぞれを意識して取り組んでいることがわかる。一方で、飼育に対する「理論研修」を行っている園が6%と、かなり低い結果となっている。小動物等を飼育していくうえで、飼育方法はもちろんだが、飼育をする際の配慮事項や飼育動物を飼うことの教育的意義等について、職員間で話し合い、「飼育動物」を通して幼児が心を揺さぶられ、豊かな体験ができるように考慮していかななくてはならないと考える。

7 「小動物を飼育する際の配慮事項」について

先のアンケートの分析・考察を受け、照屋 建太・喜友名静子（2005）（2010）『沖縄県の保育所（園）における身近な自然環境に関する研究（1）』を参考にし、生き物を飼育していく上での配慮事項をまとめてみた。

（1）飼育をするということは、「命」を預かるという意識を持つこと

生き物を飼う際、種類によっては共食いの危険性がある。教師は、園で飼育する生き物の生態を必要最小限理解しておく必要がある。また、繁殖力の高い生き物は飼育する際に、小屋を分ける等、増えないようにする等の配慮が必要であると考えられる。また生き物の寿命も十分に考慮し、職員が入れ替わる際は、次の職員へ飼育方法を申し送りし、「生命」のバトンをきちんと渡す必要がある。

（2）保健衛生上の問題

幼児がふれあいを主としている動物の場合、餌の与え方、接し方（抱っこ仕方等）を子どもへ教えていく必要がある。また、ミドリガメ（正式名称：ミシシippアカミミガメ）等、ふれあいを楽しめる小動物はサルモネラ菌等の菌を保有していることが多い。そのため、手洗い等は忘れずに習慣付ける必要がある。また、最近は「アレルギー」の子も増えてきていることから、飼育する際には家庭との連携も密にし、配慮していく。

（3）飼育動物の死

飼育動物の死は悲しい出来事である。しかし、動物の死を無駄にしないように子ども達へ「命」の大切さを伝える活動につなげる必要がある。生きるものには必ず到来する死。「動物」の飼育の目的は単に「世話をする」だけではない。子どもながらに「死」を理解し、「生」の大切さを感じさせるよい機会と捉える必要がある。

（4）自然環境に対する配慮（外来種の問題について）

先のアンケートを見てみると、現在、幼稚園で多く飼育されているメダカ、グッピー、カメ、ザリガニ等は、元々沖縄には生息していなかった「外来種」と呼ばれるものである。最近は飼育が困難になった場合に、野外へ離してしまうことが多くなり、在来種の中に入ってきたことで自然界の生態系が崩れてしまう恐れがある。

動物を飼うにあたり、「飼えなくなったら野外へ放す」という安易な考えではなく、「命」を預かるのであるから、将来を十分に考えて飼育することが望ましい。

VI 指導の実際・仮説の検証

1 指導計画と検証保育までの実践

時	月日	活動名	子どもの様子	考察
1 2	11/18	<p>*あっ！仲間が増えてるよ！ <ザリガニ・ミドリガメ飼育へのきっかけ作り></p> <p>*仲良しになりたいね！ <飼育に関する話し合い></p>	<p>○仕掛けた環境（サリガニ・ミドリガメ）に興味津々に関わり、「触りたい」という声が聞かれた。観察しやすいように大きめの容器に入れて観察したり、触れ合ったりできるようにした。</p> <p>○図鑑や絵本で生態等を調べる姿が見られた。</p> <p>○触った感触や様子を、友達同士で伝え合う様子も見られた。</p> <p>○「名前をつけたい！」という声が聞かれた。</p> <p>△興味や関心を示さない子が6人いた（全て女児）。 △ザリガニやカメを乱暴に持つ等、気になる扱いが見られた →帰りのひとときで話し合った。</p>  	<p>子ども達の興味や関心を捉え、意図的・計画的に環境を構成したことにより、ほとんどの子が「小動物」という環境に喜んで関わる姿が見られた。また、飼育していくことにも意欲的な様子が見られた。</p> <p>～明日への手立て～ 子ども達から出た「つぶやき」「思い」や姿を大切に、環境構成や援助の工夫を図っていく。</p>
3	11/19	<p>*わかったことをみんなに教えてね <ザリガニ・ミドリガメに関する情報収集></p>	<p>○前日に引き続き、ほとんどの子が触れ合ったり観察したりしている（持つ際もやさしく持つ様子が全体的に見られた）。</p> <p>○「カメってリンゴを食べるって」とエサを調べて持ってきた。</p> <p>○汚れた水を「きれいにしよう」と、教師と一緒に掃除する姿が見られた。</p> <p>○昨日、ザリガニやカメに関わらなかった女児（3人）が、ミドリガメと触れ合っていた（そのうち2人は始め、触れずに見ていたが、最後は手のひらにのせていた）。</p> <p>△「触れあう」姿が多く見られる中、今日は図鑑を活用して調べる様子はほとんど見られない。</p> <p>（カメの） けーた。よろしくね。</p> <p>（ザリガニの） ふみちゃんのはサミって、ちいさいね。</p>  	<p>昨日かかわらなかった子が朝から触れ合ったり、観察したりしていた。興味はあるが、触る事が出来ない様子であったので、一緒にかかわった。また、全体的に優しく触れ合っている姿から、昨日扱い方に関する事を話し合ったことが今日の姿に繋がっているのではないかも。</p> <p>～明日への手立て～ 触れ合う中でも、生態に興味を持って欲しい思いから、帰りのひとときで※「発見メモ」を活用していた子を紹介した。明日から、また新しく小動物を環境として仕掛ける。その触れ合う姿に加え、生態に興味を持たせられるきっかけになるような援助や環境の再構成をしていく。</p>
4	11/20	<p>*ねえ！今度はモルモットがきたよ！ <モルモット飼育のきっかけ作り></p>	<p>○朝のひとときの際に話し合い、モルモットを新しい環境として仕掛けた。遠足で触れ合った経験から、優しく抱く子がほとんどであった。時々、奪い合いになりそうな場面も見られたが、子ども達なりに話し合い、順番よく触れ合っていた。</p> <p>○教師と一緒に関わる中で、「何を食べるのかな？」と図鑑コーナーに行き調べる様子や、「ペットボトルみたいな物で水飲むってよ」と調べた事を伝えてきていた。→それをすぐ発見メモに書いて子ども達と一緒に掲示した。</p> <p>○モルモットをじっくり観察している姿が多く見られ、「下の歯が2本あった！」「うんちがコロコロしてる」等、子ども達なりに気付きや発見を楽しむ様子が見られた。</p>  	<p>モルモットを新しい環境として仕掛けると、触れあっていく中で食べ物や飼い方について図鑑や絵本を広げて調べる姿や、じっくり観察する姿が見られた。その姿から、子ども達がモルモットの生態に興味・関心を持っている事が伺える。また、視覚教材という「環境」への関わりが多くなってきた。</p> <p>～明日への手立て～ 引き続き子ども達の関わりや気付きから、「発見メモ」の活用を図っていきたい。</p>

時	月日	活動名	子どもの様子	考 察
5	11/25	<p>*仲間が どんどん増え ていくね！ ＜ポスター作りの きっかけがう まれる＞</p>	<p>○登園後、すぐモルモットを囲んで触れ合ったり、エサをあげたりして積極的に関わっている姿が見られた。</p> <p>○カメとザリガニの飼育ケースの掃除も子ども達が進んで一緒に掃除をするようになってきた。手際よく、声を掛け合って洗っていた。</p> <p>○発見メモを活用し始める様子が見られてきた（調べた事や気づいた事を自分なりの言葉で書いていた）。</p> <p>○虫めがねを手に取り、観察している子が多くなってきた。</p> <p>○隣のクラスの子の「(小動物に)名前がついてるの?」というつぶやきを子ども達へ投げかけた所、「みんなにも名前を知らせたい」という話し合いになり、これがポスター作りの活動へと繋がっていった。</p> <p>△話し合いの中で「やりたくない」という子が数人見られた。</p> <p>△飼育動物への扱い方が少し乱暴な様子であった。</p>     <p>気づいた事を 発見メモへ記入</p>	<p>教師が子ども達の関わりや気づき、またつぶやきを「発見メモ」へつなげてきたことで、少しずつ発見メモを活用し始めている様子が見られてきた。また、「虫めがね」を活用する姿も多く見られるようになってきたことから、視覚教材という「環境」へ喜んで関わっていることが伺える。</p> <p>～明日への手立て～</p> <p>ポスター作りに対して消極的な子が数人いたが、共感し、その子の思いを受け止め、明日へつなげる言葉掛けをした。明日の話し合いは全員がポスター作りに意欲的になれるような言葉掛けや援助をしていきたい。</p>

6	11/26	<p>*飼育動物の ポスターを 作ろう！ ＜ポスター作り についての話 し合い活動＞</p>	<p>○それぞれの飼育動物に触れたり、観察したり等、関わる様子が見られた。</p> <p>○発見メモも、少しずつ活用している姿が見られた。</p> <p>○他のクラスの子も子ども達も飼育動物の存在がわかるようになり、触れあいを楽しむ姿が見られるようになってきた。</p> <p>○小動物を飼い始めたことで、一人一人が落ち着いて生活や遊びを進めているように感じる（加配教諭より）。</p> <p>○昨日、ポスター作りに関して消極的だった子が、全員自分から進んでグループ決めに参加していた。また、必要な材料に関しても子ども達から意見が多く出てきた。</p> 	<p>ポスター作りの話し合いを進めていく中で、意欲的な様子が多く見られ、消極的な子はほとんどいなかった。また、好きな友達と相談しながらグループを決めている姿や、「材料は段ボールも必要だよ」「大きな紙がいいんじゃない?」という姿から、明日の活動に対して期待を持っている様子が伺えた。</p> <p>～明日への手立て～</p> <p>「環境構成」「子ども達が意欲的になるような言葉掛けや援助」を心掛け、友達とのポスター作りをきっかけにして、より親しみを持って飼育動物へ関わられるように援助していきたい。</p>
---	-------	---	---	---

※「発見メモ」について
→小動物とのふれあいの中で、観察して自分なりに気づいた事や図鑑で調べてわかったことをいつでも書けるように、図鑑コーナーへ準備して置いてあるメモのこと。このメモを掲示することで、小動物の特徴や生態に興味・関心が高まるのではないかと考え、コーナーを設けた。
(尚、文字の読み、書きに関しては個人差が見られる為、読めない子や書けない子へは、一緒に読んだり、書き添えたりして個別にかかわり、配慮してきた)

2 保育実践指導案 I

(1) 活動名 「かわいい仲間達を紹介しよう！～飼育動物のポスター作り～」

(2) ねらい ◎友達と一緒に飼育動物の「ポスター」を作り、動物に心を寄せて世話をしていこうとする気持ちを持つ。

(3) 活動設定の理由

幼稚園教育要領「環境」のねらいでは、「身近な環境に自分からかかわり、発見を楽しんだり、考えたりし、それを生活に取り入れようとする」と示されている。幼稚園において、子ども達が触れる身近な環境の中で、子どもの好奇心や探求心をかき立て、思わずかかわりたくなるような魅力ある自然に出会わせたり、必要に応じてそのような環境を用意したりすることが大切であると考え。

そこで、学級において「環境」として仕掛けた小動物への観察やかかわりから、子ども達が特徴や生態に気づいたことを、「ポスター」として形にすることで、更に小動物への興味関心が高まり、心を寄せて世話をしていこうとする気持ちを持つててであろうと考え、本活動を設定した。

①子どもの実態

園庭にいるバッタやミミズ等を見つけたり捕まえたりする等、進んで生き物へかかわろうとする子や、友達同士折り方を教え合いながら折り紙遊びを楽しむ子、廃材を使った製作を楽しむ子等の姿が見られる。また、様々なアイデアを出し合いながらごっこ遊びを楽しむ姿もみられるが、友達との意見の違いから、遊びが中断してしまう姿が見られる。

②教材観

本活動は、人間関係の内容「(8) 友達と楽しく活動する中で、共通の目的を見だし、工夫したり、協力したりなどする。」環境の内容「(2) 生活の中で、様々な物に触れ、その性質や仕組みに興味や関心をもつ。」「(5) 身近な動植物に親しみをもって接し、生命の尊さに気付き、いたわったり、大切にしたりする。」表現の内容「(7) かいたり、つくったりすることを楽しみ、遊びに使ったり、飾ったりなどする。」を組み合わせて構成し、総合的な指導を心掛ける。友達と考えを出し合ったり工夫したりしながら、自分たちが飼育する小動物の「ポスター」を作ることで、更に小動物への興味・関心が高まり、心を寄せて世話をしていこうとする気持ちを持つててであろうと考える。また、子ども達が調べた事や気づいた事を記入した「発見メモ」もポスターへ活用していく。尚、動物の種類、生態内容等を「ポスター」として飼育コーナーへ掲示することで、活動以後は、「情報環境」としての機能が果たせると考える。

③指導観

- ア 事前に「ポスター作り」について話し合いを持ち、役割を決めておく。その際、自分で好きな役割のグループを選ばせることで、意欲的に活動へ取り組めるようにしていく。また、ポスター作りに必要な材料等についても各グループで話し合い、当日の活動がスムーズに進められるようにする。
- イ ポスターを作っている場面では、各グループでのつぶやきや思いを大切に受け止め、それぞれのアイデアや工夫などに共感していく。その際、「そうだね」「おもしろいね」「すてきな考えだね」等、子どもの思いや姿に対して言葉で認めていく。
- ウ グループ活動の中で、個々の動きや意欲に差があるであろうということを予想し、グループ内の一人一人の動きをみながら言葉をかけ、時には形にしたいイメージを聞き取りながら一緒に作ることで、表現方法を具体的に援助していく。
- エ 作った作品がすぐ掲示できるように場所をあらかじめ作っておき、ポスターが完成していく過程を見えるようにすることで、自分たちが作ったという満足感や充実感が味わえるようにする。
- オ 活動後の振り返りでは、幼児の思いや友達同士で工夫したところ等を聞き、全体場で認めていくことで自信へとつなげ、友達の良いところや、一緒に協力して活動していく楽しさを味わえるような場にする。また、ポスターを基に飼育動物についても話し合い、今後も心を寄せて世話ができるような言葉かけをする。

以上のように、教師が「ポスター作り」において援助や環境の工夫を図ることで、幼児が「飼育動物」という身近な環境へ主体的にかかわっていくのではないかとと思われる。また、活動を振り返ることで、今後も小動物に心を寄せて世話ができるのではないかと期待する。

(4) 本時の展開

指導案 (本時)			
平成 26 年 11 月 27 日 (木) うるま市立伊波幼稚園 1 組 24 名 (男児 12 名 女児 12 名)			
保育者 金城 都			
子どもの姿	<ul style="list-style-type: none"> ・園庭にいるバッタやミミズ等を見つけたり捕まえたりする等, 進んで生き物へかかわる姿が見られる。 ・友達同士折り方を教え合いながら折り紙遊びを楽しむ子, 廃材を使った製作を楽しむ子の姿が見られる。 ・友達同士で様々なアイデアを出し合いながらごっこ遊びを楽しむ姿もみられるが, お互いの意見の違いから, 遊びが中断してしまう姿が見られる。 ・学級で飼育を始めたカメ, ザリガニ, モルモットへ親しみを持って積極的にかかわる姿が見られる。また, じっくり観察し, 気づいた事を教師や友達へ伝える姿や, 図鑑から生態を調べる姿が見られるようになってきた。 		
ねらい	◎友達と一緒に飼育している小動物の「ポスター」を作り, 動物に心を寄せて世話をしていこうとする気持ちを持つ。		
<p><活動仮説></p> <ul style="list-style-type: none"> ・飼育している小動物のポスター作りの場において, 子どもの思いや考え, 工夫する姿を認める言葉掛けや, 調べた事や気づいた事をポスターにして掲示する環境構成の工夫を図ることで, 更に小動物への興味・関心が高まり, 皆で心を寄せて世話をしていこうとする気持ちを持つことができるであろう。 			
時間	○予想される幼児の活動	◎教師の援助	*評価項目
9:45	○絵本を見る。 ○教師の話聞く。 ○事前に決めたそれぞれのグループの活動内容を確認する。	◎絵本の読み聞かせをする。	*興味や関心を持って教師の話聞いているか。
10:00	<p>～飼育動物のポスターを作ろう!～</p> <ul style="list-style-type: none"> ○各グループに分かれて, テーブルやイスを準備する。 ○友達同士話し合っって役割を決める。 ○お互い考えを出し合い, 工夫しながら, 作っていく。 <p>○意欲や集中力が続かず, グループの友達へ任せてしまう。</p> <p>○他のグループの作る様子を見て, ヒントを得たり工夫したりして作る。</p> <p>○使った物を片づける。</p> <p>○教師や友達の話聞く。 ○グループごとにポスターを紹介し, 頑張った所や工夫した所を話す。</p>	<ul style="list-style-type: none"> ◎事前に話し合ったことを振り返り, 個々の役割を確認することで, 今日の活動がイメージ出来, スムーズに進められるようにする。 ◎安心した雰囲気で作成活動ができるような雰囲気作りを心掛ける。 ◎グループで協力して用意する姿を見守る。 ◎お互いの意見がぶつかる等のトラブルでは, 自分達で解決していこうとする姿を見守り, 必要に応じて援助する。 ◎各グループでのつぶやきや思いを大切に受け止める。また, アイデアや工夫などに言葉で共感し, 認めていく。 ◎個別に配慮が必要な子を事前に把握し, 必要に応じて言葉を掛けたり, 一緒に作ったりしてイメージを表現できるようにする。 ◎支援児に対しては, 加配教諭と連携してかかわっていき, 認め励まし, その子なりのペースで活動が進められるようにする。 ◎友達同士で考えを出し合ったり, 工夫したりしている姿を認め, 他児へ知らせしていく。 ◎協力しながら進めていく姿を認め, きれいに片付ける心地よさを味わわせるような声かけをする。 ◎各グループのポスターの工夫した所や頑張った所を紹介し, 全体の場で認めていくことで自信へとつなげ, 友達と一緒に活動した楽しさが味わえるようにする。 ◎飼育動物について話し合い, 今後も心を寄せて世話ができるような言葉かけをする。 	<ul style="list-style-type: none"> *喜んで活動に参加しているか。 *友達と考えを出し合ったり, 工夫したりしているか。 *飼育動物について興味や関心を持って話を聞いているか。
11:00			
評価	・ポスター作りを通して, 子ども達は小動物への興味・関心が高まり, 皆で心を寄せて世話をしていこうとする気持ちを持つことができたか。		

(5) 環境構成

黒板

- それぞれのグループの前に小動物を並べておき、製作の過程でいつでも見にいけるようにする。また、仕上がった絵や文字がポスターとして掲示できるようにしておくことで、作ったものを掲示することができる満足感が得られるようにする。
- ポスターのレイアウトは、子ども達の考えを見守っていき、必要に応じて言葉かけや援助をする。



ザリガニ グループ



カメ グループ



モルモット グループ

- ポスターへの掲示の際に、使う頻度が多くなることが予想される為、子ども達の動きを見ながら、前に移動させる(可動式ワゴン使用)。

用具

- セロハンテープ ・ ガムテープ
- ひも ・ スズランテープ
- 棒(支柱) 等

画材

- 画用紙
- マジックペン

素材

- 割りばし
- 毛糸
- カラーテープ

- ワゴンを製作コーナーから移動して活動場所の近くへ置くことで、子ども達がすぐに材料を取りにいったり、使ったりできるようにする。
- 幼児がわかりやすく、取り出しやすいように材料を分類し、表示しておく。
- 子ども達の様子を見ながら材料を追加する等、環境を構成していく。

*材料として使用するもの(用具・画材・素材)については、前日に子ども達と話し合いを持ち、準備した。

3 仮説の検証(検証保育I)

(1) 学級全体の様子

☆友達同士話し合って役割を決める

☆お互いで考えを出し合い、工夫しながら作っていく



ポスター作りでは、自分なりに考え、折り紙を得意とする子が折り紙で飾りを作ったり、ガラスに写真を透かして絵を描いたりする等、それぞれ工夫しながら自分が得意とする役割を生かしている場面が多く見られた。また、製作を苦手としている子も「虫眼鏡」を用いてカメの特徴をじっくり観察し、絵を描いている友達へ特徴を伝える様子が見られたことから、ポスター作りに対して意識をもって取り組もうとしていることが伺えた。

☆助け合う(役割分担)しながら進めている様子



モルモットの絵を描いた子が「H は、色塗りが上手だね。これ描いたから色塗ってちょうだい」と友達のをよさを認め、役割を分担しながらポスター作りに取り組んでいる姿が見られた。また、消しゴムがなく困っている子へ「使っているよ」と助け合いながら活動をすすめる姿も見られた。



きゅっきゅっ
ってなくよ



立てられるように、自分なりに工夫して作ったり、飼育動物の特徴をポスターの中に「情報」として書いたりしていた。

～環境構成として～
飼育動物をテーブルの中央に置くことで、より身近に感じ、親しみながら活動に取り組めるよう配慮した。

☆ポスター完成！！



「ここに名前を貼ろう」「どうやって飾りつけする？」等、友達同士で関わり合いながら、ポスターのレイアウトを決める姿が見られた。完成したポスターを持ってきて、「ここに飾ろう！」「一番上に飾りたいな！」という言葉から、友達と一緒に作りあげたポスターをみんなに見てもらいたいという満足感や達成感を味わっているようであった。また、活動の振り返りの場面においては、完成したポスターを見て「あっ、こまじろう（モルモット）が嬉しいって言っているみたい！」というつぶやきも聞かれた。

学級全体からの考察

学級全体のほとんどの子が期待を持って参加していた姿から、学級で飼育し始めた小動物（カメ・ザリガニ・モルモット）へ親しみの心が芽生えていることが見とれ、それがポスター作りへの意欲につながったと考えられる。また、活動の中では、それぞれが自分のよさや持ち味を発揮しながら取り組んでいたように思う。

グループごとのポスター作りの取り組みの様子は、以下の3つに分けられる。

- ①「友達と一緒に」「考えを出し合ったり、工夫したりしながら」という部分から見ると自然に役割分担が決まり、友達同士のかかわりが絡み合い、深まってポスター作りを楽しんでいるグループ
 - ②場は共有しているものの「個」の活動になっており、友達同士のかかわりがあまり見られないグループ
 - ③友達同士で取り組んでいるが、テーブルの配置によってグループ全体での関わりが少なかったグループ
- このことから、友達と一緒にポスターを作ったことに関しての充実感や満足感にグループ差が生じてしまったのではないかと考えられる。

また、今回の検証保育の活動を通して、次の反省点があげられる。

- ①友達と楽しんで活動をして欲しいという教師の思いの中に、一人一人のよさを発揮できるよう、意図的にグループを編成して活動することにより、全体的に充実した活動になったのではないかと。
- ②それぞれのグループ活動が、より近くで見えるようなテーブルの配置等の「環境構成」の弱さや、友達同士のつながりを意識させて活動が進められるような「言葉かけや援助」に関する弱さもあったので、次回の検証保育を進めるにあたり、それらの点を十分考慮して進めていきたい。

(2) 抽出児の様子

☆R児は、生き物全般に興味や関心がある。捕まえてくると、図鑑や絵本で種類や生態を調べる姿も見られる。製作が得意であり、イメージしながら集中して取り組む。友達との関わりや遊びの中で、自分の思いを通そうとする所があり、周りの友達と言い合いになる場面が見られる。

～教師の思い～

R児が興味を持ち、得意とする活動の中で、友達と一緒にかかわり、互いに協力して進めていく楽しさを味わってほしい。R児の活動の様子を観察し、よさを発揮している場面や友達とのつながりが感じられる場面を捉え、認めていけるような援助を行っていこう。



～検証保育前の姿～

「ザリガニつかんでみたいな～」と、飼育初日から興味を持って積極的に関わっている様子が見られた。

以後、生態に興味を持って図鑑で調べたり、ザリガニの絵を描いたりする姿が見られる等、R児が生き物に関して興味・関心が高い様子が伺えた。この様子から、本時の活動ではR児の良さを十分に発揮できるのではないかと期待できる。

～検証保育時の姿～

モルモットの写真の上に紙をのせ、ガラスに写真を透かして絵を描いていく等、普段の遊びの中での経験を生かした取り組みが見られた。また、「モルモットグループはこっちだよ!」「材料は〇〇が必要だよ」等、積極的にグループの友達と関わっていくR児。教師は「Rさんのアイデアがたくさんだね」と、その都度認めていく言葉掛けをしていった。ポスターの仕上げの際には、友達の考えを聞き取りながら一緒に手際よく貼り付けていた様子から、友達とのつながりも楽しんでいることが伝わってくる。



☆Y児は、生き物へ関わる姿がほとんど見られず、興味や関心が低い。絵を描くことや製作が得意であり、アイデアも豊富で表現も豊かである。明るく積極的であるが、相手の気持ちを考えることが苦手で一方向的に遊びを進めてしまいトラブルになることが多い。

～教師の思い～

Y児が、前日からこの活動に対して期待を持っていることが伺える。また、得意とする製作活動であるので、この活動を通して小動物へ親しむようになって欲しい。また、友達と一緒に協力しながら進めていく楽しさも味わってほしい。まず、本人のよさを発揮している場面で十分認めていき、友達のよさも感じられるような援助を行っていこう。

～検証保育前の姿～

「かわいい!」「触りたいな」と、飼育初日から数日は興味を持って積極的にかかわっている様子が見られた。しかし、次第にかかわる様子が見られなくなり、飼育コーナーへはほとんど興味を示さず、他の遊びを楽しむ姿が見られた。前日にポスター作りを話し合った際は、「全部作りたい」と意欲を見せていた姿から、好きな製作活動への意欲が感じられた。



～検証保育時の姿～

最初から積極的に友達に関わる姿が見られ、アイデアを提案する等、友達とのつながりが見られた。しかし、活動が進むにつれ、急に自分だけで色を塗り始めたり、文字を書き始めたりする等、一方向的な行動が目立ち、トラブルが出始めた。友達同士での解決が難しい状況になり、「Yさんがもし同じ事をされてしまったらどんな気持ちかな?」と、教師が相手の気持ちに立てるような言葉掛けをしていった。Y児も他の子へペンを貸す等気遣う様子が見られたが、トラブルが続き、ポスターを最後まで完成させることができなかった。

☆M 児は、生き物に関して興味はあるが、触ることは少し苦手である。屋外で身体を動かす遊びを好み、製作活動への興味や関心が低い。苦手意識もあり、自分からなかなか取り組もうとしない。明るい性格で社交的である。行動面において、こだわりが見られる（特別支援児）。

～教師の思い～

加配教諭と連携し、「ポスター」というものがどういったものであるかをわかりやすい形で前もって知らせておこう。また、M 児が苦手としている活動であると予想されるが、その中で友達とのつながりを感じながら、M 児もグループの一員として楽しめる活動になるような援助を寄り添いながら行っていこう。



～検証保育前の姿～

小動物に対して、興味や関心はあるものの、触れ合うことが苦手で、友達が触る様子を見ている M 児。ある日、図鑑等が置いてあるコーナーに「虫めがね」を見つけ、物が大きく見えることに気付いたことから、小動物をじっくり観察する姿が見られるようになった。

～検証保育時の姿～

製作活動が始まると、ペンは持つものの活動には加わる様子が見られない。カメラの写真を見つけ、「目はどこにあるのかな」と、虫めがねを取ってきてじっくりと観察する姿が見られた。製作には加わらなかったが、絵を描いている子に対して特徴を伝える様子が見られた。（集中力が続かず、途中で活動から外れてしまった）

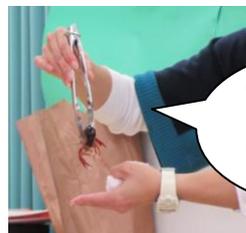


抽出児からの考察

以上のことから、子どもの興味や関心を捉え、「小動物」を身近な環境として仕掛け、直接触れ合う等の関わりを持たせるような環境構成や援助の工夫を図ってきたことにより、子ども達の興味や関心が更に高まった。よって、これまでの活動の中での環境構成や教師の援助から、抽出児にとって具体仮説①はおおむね有効であったといえる。しかし、一人一人のよさを発揮できるような援助においては課題がみられた為、今後の学級活動の内容や手立てについて工夫や改善を図っていきたい。

(3) 検証保育後の様子

<p>12/8</p> <p>☆みんなで考えよう! ＜飼育動物についての全体集会＞</p>	<p>*子ども達の乱暴な扱い方によって、ザリガニの足が1本取れてしまう。その他にも、トングでザリガニを挟んで遊ぶ行為や、「カメの甲羅は堅いから」と、高い位置から落として遊ぶ等が見られた為、その機会を捉え、全体で飼育動物についての緊急の話し合いの場を設定した。</p> <p>実際にあった行為をロールプレイで示した。また、実際に骨が折れてしまい、歩けないウサギの写真を見せ、小動物の気持ちを考えさせる問いかけをし、話し合った。</p> <ul style="list-style-type: none"> ○「痛そう」「かわいそう」との声が多く聞かれ、皆真剣に話を聞いている。 ・「これからみんなが出来ることって何だろう?」という問いかけに対して、実際に普段乱暴に扱っている子へ、意図的に聞いてみた。 ○「やさしく遊ぶ」という子が多い中、K 児が「謝る…」と答えた。自分の行為を振り返っている様子であった。 ・「優しくするっていうことは、友達へもつながるんだよ。また、学級で話し合ってね」と飼育動物にいたわってだけでなく、友達に対しても大切な気持ちであることを意識させる言葉掛けをして締めくくった。 ○集会後、自らカメのコーナーへ行き、K 児は「ごめんね」と謝っていた。「よく言えたね」と、その姿を十分に認めつつ、K 児の行為を一緒に振り返り、今後カメの気持ちを考え、優しい心で触れ合うことができるように話し合った。 	<p>～考察～</p> <p>実際に扱っていた姿をロールプレイや写真で「客観的に」見せたことで、どの子も真剣に聞き、考えている姿が見られたと考える。</p> <p>～今後の手立て～</p> <p>「扱い方」は、今後も場や機会を捉えて繰り返し援助していく。また、飼育を続けていく中で、親しみやいたわりが持てるような言葉掛けや援助を行っていく。</p>
---	---	--



ザリガニは
どんなきもち
なんだろう・・・

4 保育実践指導案Ⅱ

(1) 活動名 「ミニミニ発表会をしよう！」

(2) ねらい ◎友達と一緒に小動物を紹介する楽しさや、相手にみてもらう喜びを味わう。
◎友達によさや頑張っている姿を認める。

(3) 活動設定の理由

1回目の検証保育を振り返ってみると、「集団での活動」を意識しすぎた結果、「個のよさ」をいかすための援助に課題を感じた。また、子ども達が小動物に関して、調べたことや気づいたことを書き記してきた「発見メモ」の活用に関しても不十分であったと考える。それらを踏まえて、今回の検証保育においては、「発見メモ」の言葉を基に一人一人がそれを「ペープサート」に表すことで、グループ活動の中にも「個」を活かしていきたいと考える。また、グループに分かれてそれぞれの小動物の特徴や生態を紹介することで、子ども達が小動物への興味・関心を更に高められるようにする。更に、全体で認めていけるような場や機会を設ける等、援助の工夫を図っていくことで、友達と演じる楽しさや、相手に観てもらおう喜びを味わうのではないかと考え、本活動を設定した。

(4) 本時の展開

指導案（本時）				
平成 27 年 1 月 29 日（木）うるま市立伊波幼稚園 1 組 24 名（男児 12 名 女児 12 名） 保育者 金城 都				
子どもの姿	<ul style="list-style-type: none"> ・学級で飼育している小動物をそっと抱っこする等優しく関わる姿が多く見られ、飼育ケースを手際よく掃除したり、栽培園のニンジンの間引きしてエサをあげたりする姿が見られる等、世話や扱い方に関して全体的に成長が見られる。 ・戸外では、友達を誘い合ってサッカーや縄跳び、鬼ごっこ等を楽しむ姿が見られ、室内では、互いに考えや思いを出し合いながらごっこ遊びや製作遊び、コマ回しを楽しむ姿が見られる。 ・発表会に期待を持ち、意欲的にリズムや歌等に取り組み姿が多く見られる。しかし、恥ずかしさから表現が小さくなってしまっている等、表現の仕方に関しては個人差が見られる。 			
ねらい	<ul style="list-style-type: none"> ◎友達と一緒に小動物を紹介する楽しさや、相手にみてもらう喜びを味わう。 ◎友達によさや頑張っている姿を認める。 			
<p><活動仮説></p> <p>①それぞれの小動物の生態や特徴について、自分たちが調べた事や気づいた事をペープサートで紹介することで、表現する楽しさを味わうことができるであろう。</p> <p>②場の構成や援助を工夫し、発表会の形態をとることで、相手にみてもらう喜びを味わい、また友達によさや頑張っている姿を認めていくことができるであろう。</p>				
時間	☆ 環境構成	○ 予想される幼児の活動	◎ 教師の援助	* 評価項目
9:30	<div style="border: 1px solid black; padding: 5px; margin-bottom: 5px;">黒板</div> <div style="text-align: center;">教師 ○</div> <p>(グループ毎に並ぶ)</p>	<ul style="list-style-type: none"> ○教師の話聞く。 ○今日の活動内容を確認する。 	<ul style="list-style-type: none"> ◎前日に話し合ったことを振り返り、今日の活動がイメージ出来、子ども達が意欲を持ってスムーズに進められるような言葉かけをしていく。 	*興味や関心を持って教師の話聞いているか
9:40	<p>☆当日の会場について子ども達と話し合い、前日に一緒に設営することで、気持ちを高められるようにする。 (舞台・客席・装飾等)</p>	<ul style="list-style-type: none"> ○各グループに分かれて、ミニミニ発表会へ向け、発表の流れや内容を練習したり、確認したりする。 ○消極的になり、グループの友達へ任せってしまう子がいる等、主体的に取り組もうとしない子がいる。 	<ul style="list-style-type: none"> ◎安心した雰囲気表現活動ができるような雰囲気作りを心掛ける。 ◎グループで協力して取り組んでいる姿を見守り、認めていく。 ◎各グループの思いを大切に受け止める。また、一人一人の表現を認めながら、その子なりのアイデアや工夫などに言葉で共感認めていく。 	*喜んで活動に参加しているか
9:50	<div style="border: 1px solid black; padding: 5px; margin-bottom: 5px;">舞台</div> <div style="text-align: center;">○ ○ ○ ○ ○</div> <p><観客用のイス></p> <div style="border: 1px solid black; padding: 5px; margin-bottom: 5px;">黒板</div> <div style="text-align: center;">教師 ○</div> <p>(グループ毎に並ぶ)</p>	<p style="text-align: center;">～ミニミニ発表会をしよう！～</p> <ul style="list-style-type: none"> ○各グループで、小動物の紹介をする。 ○各グループの紹介に興味を持って聞く。 ○意欲や集中が途切れてしまう子がいる 	<ul style="list-style-type: none"> ◎個別に配慮が必要な子を事前に把握し、言葉を掛けたり、認めたりしていく。また、必要に応じて一緒に参加する等、配慮していく。 ◎支援児に対しては、加配教諭と連携してかかわっていき、認め励まし、幼児なりに活動が進められるようにする。 	*友達と考えを出し合ったり、工夫したりしているか。
10:30	<div style="border: 1px solid black; padding: 5px; margin-bottom: 5px;">黒板</div> <div style="text-align: center;">教師 ○</div> <p>(グループ毎に並ぶ)</p>	<ul style="list-style-type: none"> ○教師や友達の話聞く。 	<ul style="list-style-type: none"> ◎友達同士で考えを出し合ったり、工夫したりして表現している姿を認めていく。 ◎各グループが紹介を終える毎に、他児の感想やつぶやきをひろうことで、相手のよさや、頑張っている姿を互いに認め合えるようにしていく。 ◎各グループの紹介を、全体の場で認めていくことで自信へとなげ、友達と一緒に活動した楽しさや見てもらう喜び・満足感が味わえるようにする。 	*ミニミニ発表会を楽しんでいたか。
評価	<ul style="list-style-type: none"> ・友達と一緒に小動物を紹介する楽しさや、相手にみてもらう喜びを味わうことができたか。 ・友達によさや頑張っている姿を認めることができたか。 			

5 仮説の検証（検証保育Ⅱ）

（1）検証本時までの様子

- ①自分が紹介したい小動物を選び、小動物の特徴等、伝えたい内容の言葉を自分でじっくり考えた。
- ②「後ろの人まで見えるには、どれくらいの大きさに描いたらいいかな？」と話し合い、全体で共通理解を図り、ペープサート作りを始めた。



～どの子も、伝えたい気付きや発見を絵にしようとして意欲的にペープサートを作っていた～



（2）学級全体の様子

☆ミニミニ発表会でどんなことを頑張る？（事前に各グループで話し合い、めあてを決める）



みんなで
入場の仕方を合わせようか？
～リーダーを中心に話し合っている様子～

子ども達が今日の活動において、互いが目的を持ち、意欲的になって欲しいという教師の願いから、発表会の前に各グループで「めあて（頑張りたいこと）」を話し合ってもらった。

- *けーた（カメ）…みんなで一緒に入場して、かけ声を頑張る
- *ふみちゃん（ザリガニ）…（ミニミニ発表会を）全部（最後まで）頑張る。
- *こまじろう（モルモット）…入場をみんなで合わせる。

☆ミニミニ発表会での各グループの発表の様子



～けーた(カメ)グループ～

自分たちで決めた入場曲（♪うさぎとかめ）に合わせて、カメになりきり、「のっし のっし」と特徴を捉えて入場していた。トップバッターで緊張していたが、元気いっぱい大きな声で紹介している姿が見られた。

～ふみちゃん(ザリガニ)グループ～

リーダーを中心として、みんなで「ふみちゃんの紹介をします」と声を揃えて挨拶をしていた。自己紹介をした後、それぞれが発見したことを紹介していた。また、緊張して忘れてしまった友達へ、横からさりげなく教えてあげる温かい場面も見られた。

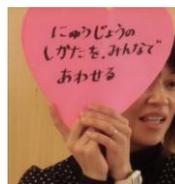


～こまじろう(モルモット)グループ～

「歯が2本生えています」「きゅっ、きゅっと鳴く時がある」等、モルモットの細かい特徴を捉えた紹介が多くあった。普段、発表する機会の少ない子がみんなの前で堂々と大きな声で紹介している姿が見られた。

☆他のグループの紹介をみることで、友達のよさを見つけて認め合う。

☆各グループのめあてを振り返る



活動の振り返りでは、「リーダーを頑張っていた」「大きな声で紹介していた」等の言葉が聞かれ、友達のよさや頑張っている姿を互いに認め合っている様子が伺えた。

本時の活動の前に立てた各グループの「めあて」を振り返り、頑張っていた場面や工夫していた所を認めていった。また、改善が必要な所をみんなで話し合い、これからの取り組みへのつながりを図った。

☆ミニミニ発表会の進行やあいさつ等、係の様子



司会・進行



はじめのあいさつ



終わりのあいさつ

ミニミニ発表会について、事前に話し合う中で「司会」「はじめのあいさつ」「終わりのあいさつ」等、係に進んで取り組む姿が見られた。また、当日も自分なりに自覚し、意欲的に係や進行をこなしている姿が見られた。

学級全体からの考察

前回の検証保育で活かすことの出来なかった「発見メモ」を活用し、また、「個のよさ」をいかす取り組みとして一人一人が「ペープサート」を作り、小動物の特徴を捉えてグループ毎に発表する場を設けることにした。ペープサート作りでは、子ども達が意欲を持って自分なりの表現を楽しむ姿が見られ、思い思いに描かれたペープサートはどれも「個のよさ」がいかされたものとなっていた。

各グループの紹介を見てみると、自分たちで選んだ曲に合わせて入場するグループや、小動物の動きを真似て入場するグループ、挨拶やかけ声をみんなで揃えて発表するグループ等、それぞれの紹介では随所にアイデアや工夫が見られた。その様子から、友達と一緒に考えたり工夫したりしながら小動物を紹介しようとする意欲が見とれた。また、活動の振り返りでは、「〇〇は、大きな声で言っていたよ」「リーダー頑張っていたね」等、友達の頑張っている姿やアイデアを認め合う場面が見られる等、お互いのよさを感じている様子が伺えた。さらに、ミニミニ発表会へ向けて事前に話し合う中で、司会や係等に積極的に取り組もうとする姿からも、期待を持って取り組んできた様子が伺えた。

しかし、紹介したい意欲はあるものの、当日は人前で発表をするという緊張から気持ちを抑えられず、ほとんどの子が興奮して落ち着かない様子であった。このような子ども達の様子から、人前で発表する場や機会に対する経験が少ない様子も伺えた。よって、そのような場や機会を与えることで、「発表する経験」を多く積むことができるような援助の工夫を図り、子ども達が人前で表現できた喜びや自信、満足感を得られるようにしていきたいと考える。

(3) 抽出児の様子

☆I 児は、アイデアが豊富で製作活動が得意である。遊びや生活の中では、友達に自分の考えを伝えながらも、相手の考えや思いを受け入れながら活動をすすめる姿が多く見られる。しかし、集会や話し合い活動等、全体の場においては、発言することが少なく、消極的な姿が見られる。

～教師の思い～

ミニミニ発表会の場において、I 児が友達と協力しながら活動を進める中で、全体の前で自分の思いを表現する楽しさを味わってほしい。I 児の活動の様子を観察し、よさを発揮している場面では言葉を掛けていく等、十分に認めていけるような援助を行っていく。

これで
ミニミニ発表会を
終わります！



終わりのあいさつ
の様子



～検証保育時の姿～

仲の良い R 児が同じグループにいて、安心して活動を楽しんでいる姿が見られ、「ザリガニの赤ちゃんは白い色をしています」と、大きな声で紹介していた。その後は満足な表情を浮かべ、緊張も和らいだ様子で、他のグループの紹介を最後まで興味を持って見ていた。また、「終わりのあいさつ」の係りを一人で頑張っていた姿から、ミニミニ発表会を通して、全体の場で話す楽しさや満足感を感じ取っている様子が伺えた。

☆T児は、生き物に対して興味関心が高く、友達と一緒に小動物を触ったり観察したりしている。最近では、自分の思いを友達へ伝えながら遊びを楽しむことが多くなってきたが、発表する場面や友達とのトラブルの場面では自分の思いを言葉にすることが難しく、担任や加配教諭の援助が必要である。

～教師の思い～

T児が活動を進める中で、自分が見つけたことを自分なりの言葉で表し、それを全体の場で表現できた喜びを味わってほしい。加配教諭と連携し、I児を見守り、時には言葉を添えながら、頑張っている場面では十分に認めていく等、援助を行っていく。

はさみ(が) とげとげ



～検証保育時の姿～

取り組みの過程において、T児は不安な様子で、ザリガニの特徴を上手く言葉にできず、加配教諭に依存する姿が多く見られた。その都度不安な気持ちを受け止めつつ、話し方や内容を一緒に確認する援助を心掛けてきた。練習を重ねる中で、次第に自分の言葉で表現できるようになり、加配教諭が側につかなくても友達と一緒に紹介できるようになってきた。

本時では、入場時には緊張して落ち着かない様子が見られたが、「ハサミ(が)トゲトゲ」とはっきりとした言葉で紹介していた。発表を終えた表情からは、達成感や満足感を十分に味わっている様子であった。

抽出児からの考察

本時の活動の様子から、I児・T児共に、自ら小動物の特徴を捉えた「ペープサート」を用いて、友達と一緒に全体の場で紹介できた喜びや満足感を味わっている様子が伺えた。本時を迎えるまでの取り組みの中で、教師がそれぞれの気持ちに寄り添い、活動が負担とならないよう、その子のペースを大事にしながらかける言葉かけや具体的な指導をしたり、見守ったりしてきた。特に、T児においては、本児が安心できるように、紹介する言葉を加配教諭がペープサートの裏に書き添えておく等、細やかな配慮を心掛けてきた。このようななかかわりによって、それぞれが安心して本時の表現活動ができたのではないかと考える。また、自分の紹介が終わると、友達の紹介に興味深くみている様子から、やり遂げた達成感や満足感も伺えた。

本時の活動後、生活発表会の取り組みの中においても、共に大きな動作でリズムに取り組む姿や、元気いっばいに台詞を言ったり歌を歌ったりする姿があり、意欲的に取り組む姿が多い等、変容が見られた。

以上のことから、I児やT児に対し、友達と表現活動を楽しみ喜びを味わえるような教師の援助や環境構成は、概ね有効であったと考える。

Ⅶ 研究の成果、課題・対応策

1 成果

- (1) 子どもの興味・関心を捉えて小動物を環境として仕掛け、意欲的にかかわりたくなるような工夫を図ったことにより、クラス全体が親しみをもって小動物とかかわることができ、その後のポスター作りやペープサート等の表現活動への意欲的な取り組みにつながった。
- (2) 「ポスター作り」というグループ活動で、友達という存在が人的環境となり、友達と考えを出し合いながら活動を進めたり、認め合ったり、助け合ったりする等、友達同士のかかわりやつながりが深まった。
- (3) 個人での「ペープサート作り」の活動をしたことで、グループという集団の活動の中にも「個がいかされる」場面が見られ、お互いの良さを認め合うことができた。

2 課題・対応策

- (1) 子どもの内面を把握・理解し、その都度適切な言葉掛けや援助をしていくことに課題が見られたので、こども達の遊びや生活の場面において、付箋紙やメモの活用等、観察や記録の工夫を図っていく。
- (2) 子どもが小動物に限らず、遊びや生活の中で、様々なことへ興味・関心を持ち、気付きや発見を楽しめるよう「ひと・もの・こと」のバランスを意識し、年間計画に位置づけ、幼児の育ちが感じられるよう意図的・計画的な環境構成の工夫を図っていく。

(4) 発表会の様子

検証保育のきっかけとなった「発見メモ」の内容は、子ども達が日々小動物と関わっていく中で、自分なりに気付いたことや特徴、また図鑑で調べたこと等が細かく書かれていた。「小動物」という環境を通して、子ども達からでてきた「気づき」や「発見」、「疑問」等を、表現できる機会はないかと考え、ペープサートを用いた「小動物の紹介」という表現活動が、今回の検証保育への取り組みとなった。

その取り組みを、生活発表会で「表現させたい」という教師の思いと、「動物たちを紹介したい」という子ども達の思いが重なり、クラスの演目として、取り組むことになった。

ペープサートでの紹介の他に、みんなで名前を付けたことや、小動物とかかわる中で起こった出来事等、子ども達と話し合い、オリジナルの内容に仕上がった。誕生会、ミニ発表会（リハーサル）等、全体場で発表する経験を重ねていく中で、紹介の仕方や声の大きさ等に変容が見られた。また、クラスだよりを活用し、保護者へ取り組みの様子を伝えていった。

生活発表会当日、子ども達は緊張しながらも、思い思いに表現を楽しんでいる様子が伺えた。また、子ども達の生活の中から生まれた「ペープサート」を交えた表現活動に対し、保護者から「子ども達が小動物と密に関わってきた様子がよくわかりました」という言葉が聞かれた。

生活発表会での 各グループの紹介の様子



けーた (カメ) グループ



ふみちゃん (ザリガニ) グループ



こまじろう (モルモット) グループ



こまじろうは「トンネル」
(子ども達の手作り)に、
もぐるときがあります！

<参考文献・引用文献>

・小田豊 湯川秀樹	2009	『保育内容 環境』	北大路書房
・岸井勇雄 無藤隆 柴崎正行	2009	『保育内容・環境』	同文書院
・秋田喜代美 増田時枝 安見克夫	2009	『保育内容 環境』	(株) みらい
・無籐隆	2009	『ポイントと教育活動』	東洋館出版社
・文部科学省	2008	『幼稚園教育要領解説』	フレーベル館
・森上史郎 柏女霊峰編	2008	『保育用語辞典第4版』	ミネルヴァ書房
・照屋建太 喜友名静子	2005		
		『沖縄県の保育所(園)における身近な自然環境に関する研究(1) —保育環境としての飼育動物—	沖縄キリスト教短期大学紀要
・柴崎正行 田中泰行	2004	『保育内容 環境』	ミネルヴァ書房
・日本生態学会	2002	『外来種ハンドブック』	地人書館